

プ  
ロ  
ロ  
ー  
グ

「すごい……。私、本当に南極に来たんだ。」  
グツと心の底からこみ上げてくる感動で心が震えていた。

二〇一九年十二月七日、私は生まれて初めて冰山を見た。南極観測船「しらせ」から見えた冰山は、想像していたよりも遥かに大きく、圧倒的に壮大だった。その姿を目の当たりにして、私は息をするのも忘れ、雄大に海に浮かぶ冰山をじっと見つめていた。

「冰山ってこんなにも大きくて、美しいんだ。」

氷の表面が太陽の光を反射してキラキラ輝いている。透き通るような淡い青の氷。海の波が当たり、波しぶきをあげている。

冰山を通った風が私の頬に触れ、冷たく吹き抜けた。氷の大地である南極の空気を感じた。直接肌で感じ取れる一つ一つのリアルに、南極に来たことを実感できた。

「母にも、父にも、妹にも見せたいな。」

そう思った私は、一目散にテキストメールを送った。

「お母さん、体調は大丈夫ですか、元気ですか。私は元気です。」

今日、初めて冰山を見たんだ。

感動で心が追いつかないくらいなんだ。

私、南極にいるんだね。

行かせてくれて、ありがとうございます。頑張ります。」

これから始まる南極授業への熱い思いがわき上がってきた。  
夢を叶える『南極授業』が本格始動した。

氷の大陸、南極。その氷の厚さは、平均で約二〇〇〇メートル、最大では四八九七メートルもあり、富士山がすっぽり収まってしまうほど。広さは日本の約三七倍。過去に記録した最低気温は摂氏マイナス八九・二℃という信じられない寒さだ。

だが、海も凍りつく南極で暮らす生きものもある。ペンギンやアザラシ、そして魚やプランクトンなど。

日本では想像もできないような不思議な自然現象や景色の数々。ピンク色に染まった魔法のような空、二〇メートル先が見えない地吹雪など。私は南極でありのままの地球を実感し、自然に圧倒された。そして、地球とともに生きている生命体の一人（一つ）であることを痛感した。

たくましくも愛らしい生きものたち

地球の素肌に触れている感覚の岩脈がんみやく

地軸がわかるくらいの太陽の動き

沈む直前、緑色に光る夕陽

極寒なのに白くならない吐息

白一色の世界に覆われる地吹雪



音が融けだす氷

ミイラのアザラシ

自然の景色を観察して、地球の表情を窺<sup>うかが</sup>う

自然の音に耳を澄ませて、胸に響き渡る地球の声を聴く

刻まれた地球の時間や地球の姿を追いかけて、想いを馳<sup>は</sup>せながら

南極での日々の感動の中で

ヒトのちっぽけさと人間の魅力を感じた

私は第六一次南極地域観測隊の同行者として、令和元年（二〇一九年）十一月から約四カ月間、南極で様々な活動をし、令和二年（二〇二〇年）三月二十日に帰国した。

国立極地研究所および公益財団法人日本極地研究振興会が行う「教員南極派遣プログラム」に応募し、この年は全国からただ一人、茨城県からは初めて選ばれた。

「南極に行きたい。」

そう思い続けて約十年。

今、私は第六一次南極地域観測隊として、南極に向かう観測船「しらせ」で氷山を見ている。南極行き之选考に落ちて悔し涙を思いつきり流したこともあった。プログラムに応募する前から、ここに来るまで、様々な出来事があった。

この本では私が高校教師として、氷の大地への挑戦を通して、見たこと、感じたこと、考えたことを書かせていただきたいと思う。



目次

プロローグ ..... 1

**第一章 南極をめざして**

きっかけ ..... 10

教員採用試験 ..... 12

応募までの道のり ..... 14

初挑戦 ..... 18

九九% ..... 26

ともに生きる心、挑戦への原動力 ..... 28

極地研にて ..... 30

二回目の挑戦 ..... 34

異動 ..... 35

南極観測シンポジウム2018 ..... 36

不安と葛藤 ..... 40

高校生南極派遣プログラムの提案 ..... 40

**第二章 三回目の挑戦**

例年より早い、募集開始！ ..... 46

母の病	48
面接試験	50
「どこに行くの?」	54
冬期総合訓練	56
南極での歩き方〜ルート工作〜	58
クレバス脱出&救出訓練	63
南極で生きる覚悟〜命、人生を預け合う〜	67
厳格な健康診断	73
夏期総合訓練	75
正式発表	77
隊員室開き	81
全校集会	83
スタッフTシャツ	85
教え子たちとの再会	86
全員打ち合わせ	88
「しらせ」体験航海	91
荷物搬入	92
明治記念館での壮行会〜仲間とともに南極へ〜	94
「しらせ」出港	96
感謝と応援を胸に	97
成田空港	99



## 第三章 いざ、南極へ

人生初めての海外旅行	104
絶叫の南極海域	108
初氷山	110
ラミング航行くがんばれ！ 砕氷艦「しらせ」く	112
「しらせ」での生活	118
船室の相方	123
世界初の観測	124

## 第四章 ついに到着

初めての一步	134
昭和基地での日々	140
最も恐怖を感じた日	147
合言葉	150
南極での様々な活動	152
南極で出会った自然	168

## 第五章 『南極授業』

高校教師、南極へ行く	174
膨らむ構想、見詰め直した原点	176



道徳教育～人間を育てる南極～	177
理科教育～探究的な学習の土台～	178
出発前の準備～飼育装置を自作～	184
「しらせ」船内～チーム南極授業、結成～	189
熱い議論、涙も……	191
初！ 昭和基地で魚の飼育に挑戦	196
いざ、本番	202
妹の誕生日	222
越冬交代式、別れの日	223
オーロラ	228
帰途	231

## 第六章 南極せんせい

四カ月ぶりの我が家	234
南極せんせい、おかえりなさい	236
犬ぞり隊のタロとジロ、そしてリキ	238
南極魂	242
新たな夢に向かって	245
あとがき	248